

# 特別対談 私の問題提起はおかしいですか

橋田「死の選択は自分でしたいんですよ」

鎌田「賛成です。でも法制化には山があります」

**橋田壽賀子**  
かまたすがこ  
脚本家  
諏訪中央病院名譽院長



○一六年十一月号) 読みましたよ。

橋田 九十歳になつて初めて真剣に考えたんです。それまで死ぬなんて考えたこともありませんでした。仕事がだんだんなくなつて来て考えることがなくなつたら、「あ、もうすぐわたし死ぬんだ」と死ぬことについて考えた。そのとき、せめて死ぬ選択は自分でできないかなと思つただけなんです。

鎌田 最期のときくらいは自分で決めたい、という気持ちちはよくわかります。僕は諏訪盆地で地域医療を四十三年やってきて、患者の命は医者などの他人が決めるの

ぐ安楽死させてあげると言われたら、「ありがとうございます」と言いますよ。もう生きていたつてあんまり人の役に立たないですもの。

鎌田 立っていますよ。文春の記事によれば、昨秋の「渡る世間は鬼ばかり」のシナリオも苦労なく書いていらっしゃる。

橋田 あれは遊び心旺盛に書きました。私にとってドラマを書くことはままごとみたいなものなんです。主人公になつて別世界を楽しんでいます。だから、いくらでも書けるんです。ぜんぜん苦労がないんですね。

鎌田 作家でも脚本家でも死ぬほど苦労されている方が多いでしょう。

橋田 私のはお遊び。子どもがいないからストレスがないし、亭主が亡くなつて三十年、亭主のストレスもありません(笑)。でも心配なのはこの先、本当にしんどくなつてもう何もできなくなつて、寝てるだけで下の世話をから何からしてもらいうようになつたら、もう生きていたくないんです。子どもや孫がいれば、顔を見るために生きていきたい

私は家族も親しい友人もいませんから思い残すこともない。だから自分の意思で逝かせてもらえる法律を作つ

**鎌田 實**

ではなく、自分で決めたほうがいいと考えるようになります。僕がいちばん守つてきたのも、患者さんの「こうしたい」という気持ちに添うことなんです。だから橋田さんの考えには賛成ですよ。

橋田 私はいま幸せとも不幸とも思つていませんけど、いつ死んでもいいなと思っている。もう、やりたいこともないんです。来週から飛鳥IIでアジアクルーズに行きますけれど、別に行かなくてもいいんです。

鎌田 なるほど。

橋田 することがないから行くとでもいうんでしょうか。仕事をしたいなんて、もう思いませんしね。います

そういう人つてけつこう多いと思うんですよ。私の友達なんかみんな安楽死賛成で、「がんばってください」と言われるんですよ。

鎌田 記事を読んで、安楽死できるように日本の制度を変えてほしいという思いがよくわかりましたが、橋田さんの発言は影響力が大きいだけに、世の中に誤解され広まつては困ると感じる部分もありました。今日は、そのあたりもお話ししたいと思います。

## 認知症は必ずしも不幸ではない

鎌田 記事を読んでひとつ気になったのは、「認知症になつたら安楽死がいちばん」とお書きになつていただこうです。ひと口に認知症と言つても、けつこうまだら状で……。

橋田 どこから完全にわからなくなるのかわかりませんよね。まだらが一杯いますものね。

鎌田 そうなんです。だから橋田さんがどの程度になつたら安楽死と言つていいつもりなのか心配だと思いました。それからまだらの人でも、半分以上のことはよくわかっている人がいます。

橋田 いくら遺言状で「認知症になつたら安楽死させたくない」と書いても、お医者さんにはどこで線引きしたらいいか、わからないわけですね。

鎌田 わからないです。

橋田 だから安楽死をしていいかどうか判断する際には、弁護士さんとかお医者さんとか、複数の人が判定する必要があると思うんです。おそらく最後に決めるのはやっぱりお医者さんですね。でもまだだとなかなか決められないか。

鎌田 認知症は本当に線引きが難しいです。それに認知症がすべて不幸かというと、決してそういうわけでもありません。

佐藤雅彦さんという若年性アルツハイマー病の人は毎日出かけてブログを更新しています。花が好きだから千葉に見に行ったり、各地で病気のことを講演したり。認知症だから帰れなくなることもありますが、「僕は認知症です。家に帰れなくなりました」と書いたSOSカードを人に見せて自分で帰つてくる。お風呂のお湯を出しつぱなしにして家が水浸しになることもあるけれど、失敗はそんなに怖いことではない、と佐藤さんは言うんですね。

橋田 その方はほうぼうに行つて幸せなんですね。だ

、鎌田 そうなんです。京都や神奈川などでは、かつて医師が安楽死に関与したことが疑わされて裁判になつたことがあります。どちらかと云ふと冷たいドクターは巻き込まれないんですけど、患者思いの優しい先生は……。

橋田 溫かい先生ほど同情してしまって、どうせ死ぬなら一週間でも一時間でも痛みを短くしてあげたいと……それでも罪に問われるわけですか。

鎌田 裁判では、ドクターが負けることもあります。

橋田 それではお医者様は安楽死を嫌がりますね。

鎌田 橋田さんの記事を読んだ人は、「なんとなく贊成」が多かつたと思ひます。けれど自分や家族の場合を具体的に想定したり、国会で法律を作つていこうとなると、日本の空氣はそう簡単に変わらない。

橋田 やっぱりそうですか。それまで待つていてる時間が、私にはないんですよ。

鎌田 橋田さんが紹介されていた通り、ヨーロッパには安楽死を認めている国があります。その制度の基準は国によつて異なりますが、イスラムは外国人まで対象を広げていますね。デス・ツーリズムといって、アメリカやヨーロッパ諸国からイスラムへ行く人たちが増えているんです。

橋田 私もイスラムへ行こうと思つてるんですよ。ディ

から生きている意味はあると。

鎌田 そうなんです。佐藤さんは私に「病気になつて生活は不便になつたけれど、僕は幸せです」と話していました。正直な気持ちだと思います。

橋田 だから、そういう人はいいんです。安楽死は関係ない。本人の意思がいちばん大事なんですから。私も認知症になつたら即安楽死と言つていいわけではありません。認知症になつても幸せな方もいらっしゃるし、不幸になる方もいる。認知症もケースバイケースで判断しなくてはいけないのはわかります。でも、患者さんの中に、ひどくなつたら安楽死したいという人がいるならば、その人の意思は尊重してあげないとやっぱり不幸だと思うんです。

### リオのメダリストの安楽死観

鎌田 橋田さんの発言で、だいぶ波紋は広がつていてるけれど、法制化までにはまだいくつも山があると思いますね。

橋田 お医者様にジャッジする許可を与える法律を作るのがなかなか難しいのではないですか。責任問題も出てくるでしようから。

鎌田 スイスのNPOの論文を読んだら、年間で四百人くらい希望者が来るそうです。従来はがんの末期や難病で堪えがたい痛みを抱える人だけに安楽死を認めてきたのが、最近の文書を読むと「納得できないような決定でも、本人の意思は出来るだけ認めるほうがいい」と方針を緩和している。どうも、難病以外の高齢者にも安楽死を認め始めているようですね。

橋田 まだ生きられるのに、「もう年取つてしまんどいから死にたいよ」と言うだけで死なせてもらえるわけですか。

鎌田 安楽死したいという意思が理不尽で愚かで異常であったとしても、法律に反しない限り、病気に苦しんでる人に対するは、経験を積んでる人がジャッジするならば認めようということのようです。歯止めが利かなくなるのはまずいのではないか、と世界からは見られているけれど、スイスはその方向にむかつてゐる。自己決定権の尊重は世界的な流れでもあります。

橋田 どうしてヨーロッパの国では、話が進むんですか。

鎌田 それは個人の自由を認めようという歐州の人々の

意識の高さだと思います。命のあり方も個人の自由だと。日本は、議論の分かれるることは結論を急がずあいまいにして、空気を読みながらみんな一緒にいるよねとなる。橋田さんのように波風を立たせる人は珍しいタイプ(笑)。

橋田 私も若かつたら言わないと思います。年を取つたから言えることで、お友達もみんな年だから賛成してくれるけれど、若い人はどう思っているのか。

鎌田 橋田さんは、去年のリオのパラリンピックに出場したマリーケ・フェルフルート選手(37)をご存じですか? 車いすの四百メートルで銀メダルを獲得した女性です。

橋田 いえ、知りません。

鎌田 十代からものすごい痛みを伴う進行性の脊髄の難病と戦っています。ベルギー人の彼女は〇八年に安樂死の許可を得て、「リオの大会後に安樂死する」と報じられたので記者会見をしたんです。そこで彼女は「安樂死の許可証がなければ、私は自殺していた。安楽死は殺人ではない。より長く人生を送るために」が安らいだ」と話して話題になりました。

橋田 なるほど、いつでも死ねるなら、また頑張ろう

うムードが広がると困ると。

橋田 でも自殺の話はぜんぜん別ですよ。あくまでも安樂死させてほしい」とハッキリ意思を示しておくことが大前提です。それからお医者さんをはじめ何人かのジャッジを受けて認められなければダメ。この二つは最低限の条件ですよ。

鎌田 必ず出てくる反対の声をいかに突破するか。私は正攻法しかないと思う。気の遠くなるほどの時間がかかるだろうけど、徹底的に個人の問題など繰り返し議論することです。

橋田 法制化に時間がかかるのなら、現実的にはどうするのがベストなんでしょう。

と思って走ることもできるし、痛みも耐えられた。

鎌田 そういう意味で認められる事は……。

橋田 生きるうえでプラスになっていますね。マイナスではなくて。

鎌田 だから、けつきよく命は誰のものかという原点に戻れば、その人の家族でもないし、友達のものでもない。その人個人のものだということ。

橋田 そうです、本人が決める。

鎌田 安樂死の話題になると、どうしても認知症や難病の患者やその周辺から、「死ね、ということ」と反発する声が出てきそうです。そんなことは言つていないので。いざ、法制化を検討するとなれば、政治家はそうした声に配慮せざるを得ません。自分が関わると票が減ると考える政治家もいるのでしょうか。だからいつも議論が進まない。みんながもつと落ち着いて、自己決定にきちんとこだわった議論をすればいいんだけど。

橋田 私が認めてほしいのは、あくまで本人の意思があつての話ですよ。

鎌田 その本人の意思を尊重するにしても、自殺に近い安樂死を認めていいのかという反対の声もいつも出来ます。日本は自殺が多い国なので長い間、減らそうと努力を続けてきました。そこへ「自殺もいいよね」とい

## 第十一話「自分の値打ちを把握する感性を持つ」

(化粧品会社広報部)

北島茉利奈(24歳・独身)の場合

新しく始まった、2017年。

私なりに思うところはたくさんあります。後輩も増える、広報とは何かを語れるようになりたい。先輩にいつまで

も甘えていられない。でも、実際の私は

ダメだった。新商品の発表会。司会を任せられたのに、

うまく話せなかつた。

先輩は、「茉利奈ちゃん、よく頑張ったよ」と言つてくれたけれど、私自身が、自分にyesと言えなかつた。イベント会場からの帰り、気を紛らそらうとスマホでラジオを聴いた。

阿久悠さんのことを語る長塚圭史さん。その声に引き込まれた。「やつと自信が生まれてくる。自分の値打ちが、少しづつわかつてきた。歌謡曲らしくない。

それが誉め言葉に思えた。阿久悠は、気づいた。いく

らお金があつても、幸せにはなれない。大切なのは、

自分の値打ちに気づくこと。それを

つかむ感性を磨くこと」。

なんだか涙が流れた……。

悩んでいる暇はない。

私は自分を好きになるために、自分に

yesを言えるようになるために、自分に

闘い、感性を磨かねばならない。

気がついたら、私は胸を張つてメトロの駅を降りていた。

HOKO

yes! 明日への便り

presented by ホトブプレミアム 雨降りひらけ

毎週土曜日 好評放送中

TOKYO FM 18:00 - 18:30

FM 軽井沢 18:00 - 18:30

FM OSAKA 18:30 - 19:00

@FM(FM AICHI) 18:30 - 19:00

FM 長野 19:00 - 19:30

FM FUKUOKA 20:00 - 20:30

鎌田 橋田さんは、がんで死ぬのがいちばんいいと書かれていましたね。

橋田 ええ、わかつてから死ぬまで時間がありますからね。人生を振り返る時間もあるし、整理したいことも自分でできますから。

鎌田 私もがんがいちばんいいと思いますね。在宅での看取りもだんだんよくなつてきました。

橋田 いい先生がいらっしゃればですよ。

鎌田 そこが肝心。

橋田 でも、そういう先生となかなか巡り会えない。

大きな病院へ行くと、聴診器を当ててくれないんですよ。体にぜんぜん触らないで、パソコンの画面で検査データと画像をじっと見て病名を決めて薬を出してくださる。そんなお医者さんってイヤですよ。やっぱり心と心が触れ合わないと……。

鎌田 最近、元商社マンの方が私の『がんばらない』を読んで諷訪中央病院まで来られたんです。その方は前立腺がんだったけれど全身に転移があつて東京の病院で「もうやることがない」と宣告され、蓼科に山荘をお持ちだったので在宅での看取りを希望されて來たんです。

橋田 いちばん理想的ですね。ルギーを注いで死のことを医学生に教えてこなかつたんです。だから、死のことは苦手だと思っている医者が多い。

橋田 お医者さまのくせに、死ぬ患者を見るのが嫌という方いますものね。

### 生きてる間はちゃんと生きたい

鎌田 もちろん、徹底的に生きたいと思う人には、人工呼吸器や胃ろうをつけないであげることは大事なんです。でも橋田さんのように「寝つきりになつたら余計なことはしないでほしい」という人には、最期に温泉に入れてあげようとか、大福が好きなら食べられるようにしてあげようとか、大福が好きなら食べられるようにしてあげようとも大事で、これからはそういう医療もどんどん必要とされるはずです。

橋田 安楽死がダメなら、痛みを取つてくれて、延命治療はしないという尊厳死に望みをかけるしかないですけれど、本当にきちんと面倒をみてくれる先生はどれくらいいるんでしょう。

鎌田 今だったら三割くらいの医師は協力してくれるんじゃないかな。まあ、僕だったら。

橋田 先生ならぬ。私、住まいのある熱海で在宅医療

何ですか」と聞いたら、「こここの温泉に入ることだな」つて。寝ているのは二階なんだけれど地下に温泉を引いていたんですね。それで理学療法士が「それぐらいだったら僕が背負つていきますから今日入りましょう」と言つて男同士ふたりで温泉に入った。

僕はその翌日に往診に行つてその話を聞いたんですけど、その方はものすごくうれしかつたみたいでその話をしてくれて。それで「僕は何をしてあげたらいいですか」と聞いたら、「鎌田先生にうちの温泉に入つてもらうことかな」というので、僕は、そのとき一緒に行つた京都大学の若い研修医といつしょに入つたんです。

橋田 へえ。

鎌田 そうしたら奥さんが僕らの写真を撮つて「うちの家宝にします」と笑。主人はそのあと二ヶ月後くらいに亡くなるんですけど、弾けるように明るくなつた。「死は全然怖くない」という空気になつた。

橋田 そういう風にしてあげるのがお医者様なんですね。病気を治すより心を治してくれるような先生でないと、お任せできませんよ。

鎌田 どんなに医学が進歩しても、人は年を取るし、死は必ずやつてくる。その死を、大学の医学部は避けて死の先生を探しているんですけど見つかれないんです。いまのうちに鎌田先生にゴマをすつておこうとお願いしぐらいになつたら安楽死させてください」とお願いしてもダメですか？ 先生の病院に入院して、こつそり注射一本打つていただいて……。

橋田 注射はしませんけど（笑）、最期まで橋田さんの気持ちを汲んで看取りますよ。

橋田 じゃあ、予約しておこうかしら。スイスより近いしね。

鎌田 ウチの病院の緩和ケア病棟に来るととても大事にされるから、「もうちょっと生きてもいいわ」と思ふかもしれません。「諷訪湖の花火がもうすぐだから、花火を見てから死にます」とか言うかも（笑）。

橋田 あ、実はこの夏、諷訪湖に見に行くんですよ。

「もう死んでもいい」なんて言いながら花火を見に行く精神っていうのはどうなんだろ（笑）。血液の検査も毎月してるし、人間ドックも年に一度。

鎌田 安楽死したいと言つてる人が（笑）。

橋田 矛盾してますね。でも、生きてる間はちゃんと生きたいわけです。死ぬことも真剣に考えています。

鎌田 そのままだら状のところが面白い。それが人間で